（公社）日本給食サービス協会会長賞

『ぼくにとっての給食』

神奈川県横浜市立日野南小学校　四年一組　男子　津田　悠史

あっちのあげパンの方が大きい。むこうのデザートのみかんの方が多い。今日のサラダは山盛りだった。給食の時間はサバイバルだ。給食の時間はぼくにとって一日の中で一番大切で集中する時間なんだ。四時間目の終わりくらいから、ぼくは戦いにそなえて心を落ち着かせている。先生、ごめんなさい。授業あまり聞いてないかも。でも、それくらい給食にかけているんだ。給食の時間がいいものだと、午後もずっといい。夕飯に少し苦手なものが出ても頑張れる。宿題が多くてもへこたれない。それくらいぼくにとって給食って大切なものだ。同じメニューでもレストランよりおいしく感じられるのが本当に不思議だ。きっと友達とわいわい話しながら食べるからかな。「放課後はどうやって過ごす？」何てことない話題で盛り上がれて、大笑いできるのが給食の時間だ。

世界には給食がない国があるそうだ。戦争や国自体がまずしくて学校に行けない子供も多いとお母さんが教えてくれた。それはぼくにはショックな事だった。ぼくらがあたり前のように行っている学校に行けないなんて…。学校に給食がないなんて…。そして何とか出された給食で命をつないでいる子供がいるなんて…。毎日ちがうメニューで栄養のある給食が食べられるぼくはなんてめぐまれているんだろう、苦手だからと残そうとしたぼくは何てわがままなのだろう。友達と笑いながら学校に行けるということがどれだけ幸せなのだろうと感じた。ぼくは改めて給食はすごいと思った。そしてこの制度が世界中に広がればいいのにと思った。世界中の子供達が友達と一緒に笑いながら給食を食べられるようになればいい。世界中の子供がみんな健康で学校に通えるようになれば戦争みたいな悲しい事はなくなるのではないかと思う。

今、この作文を書いていて、ぼくは本当にめぐまれているということを実感している。だからぼくはできるはんいでこまっている人達がいたら声をかけ、助けてあげようと思う。ぼくの周りの大人達がぼくに優しくしてくれたように、ぼくもぼくの周りの人に優しくしてあげるんだ。夏休みが終わって給食が始まらないかな。ぼくが給食を通して感じた事はもしかしたら小さな事かもしれないけど、この幸せがずっと続きますように。